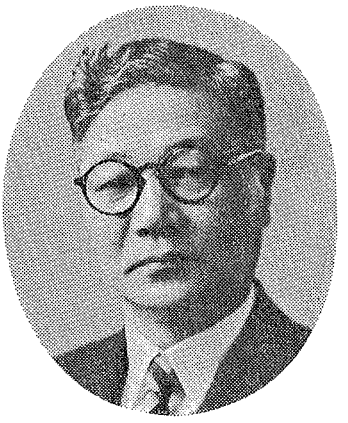

はしがき

柔道が現在国際的に認識され，各国にその修行者が増加しつゝあることは欣快にたへない。柔道の発生を根本的にさかのぼれば，人間の格闘の一つの類型として，ボクシング，或はレスリング等と基を一にし，競技の形態として成立以前に，原始人の間にさへ之が萠芽を認め得るものと言へるであらう。しかし現在の柔道は日本の柔術を母体として生れたものであり，その大成は，故嘉納治五郎教授により達成されたと言ひ得るのである。柔術は日本の武術の一つであつて，特に身に寸鉄を帯びずして，相手を制しまた自らを護る術として技術的に研究されたものである。その成立は大体十六世紀後半であり，之が各流派に分れ，系統的な形を整へたのは，十七世紀から十九世紀の始めであらう。

一部の学者が柔術がシナの拳法から発生したと言ふ説を唱へてゐるが，之は歴史的の研究によつて明らかに誤りであることが論証されてゐる。たゞ日本とシナとの古くからの交通により，シナの拳法の影響のあつたことは事実であつて，その例証もあげ得るのである。

現在の柔道と旧来の柔術の相違を簡単に言へば，柔術が，身を護り相手を制する術を学ぶことを主目的としたのに対し，柔道は，護身的な面を温存すると共に，近代的な体育法として新らしい観点から之を組みなほされ，なほその修行目的として道徳的な理想を掲げたことにあると言へよう。現在の柔道の創始は，故嘉納教授が一八八二年講道館を創立したことに始まり，その後幾多の改良が施され，現在に至つたものである。嘉納教授は，十八歳の頃，柔術を学び，その価値を認識して，之が長を採り短を棄て体育的な見地からも再組織を志し，講道館柔道といふ高い理想をもつた大きな基礎をうち立てたのである。即ち科学的な観点からも之が研讃を志し，一八九一年には西欧の進んだ解剖書を参考として，その技術に就いても合理的な研究を深めたことが伝へられてゐる。講道館に柔道医事研究会が一九三二年に設置されたのも，前記の目的によるもので，長い間幾多の研究が続けられてゐる。

一九四八年講道館の柔道医事研究会は柔道科学研究会と改められ，単に医学的のみならず広く教育学心理学等の課題としても之が採りあげられ，各学者の協力によりその成果があげられつつある。

本書は最近の研究業績の一部を集大成し，之を発表して，同好の士の批判を仰ぎ学界各方面の協力を得て，一層本学会の所期の目的を達成せんとするものである。

私は本紀要発刊に当り，会員各位の献身的なる御協力により，この成果を得たことについて心から御礼を申上るものである。

１９５８年３月25日

講道館長　嘉　納　履　正